

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	共和主義の象徴化 : ゾラ『前進する真実』におけるシュレール=ケストネール
Author(s)	宮川, 朗子
Citation	フランス文学, 27 : 40 - 51
Issue Date	2009-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041098
Right	
Relation	



共和主義の象徴化

—— ゾラ『前進する真実』におけるシュレール＝ケストネール ——

宮川 朗子

ドレフュス事件は、十九世紀フランス社会を二分した大事件であり、「私は告発する...!(J'accuse...!)」の名で知られるエミール・ゾラのパンフレ「共和国大統領フェリックス・フォール氏への手紙(Lettre à M. Félix Faure Président de la République)」(以下、このテキストは、一般によく知られているタイトル「私は告発する...!」と記す。)は、ドレフュス再審請求への道を開いたテキストとして世界中に知られ、ゾラの事件への参加は、歴史学や社会学の研究の場でもしばしば言及されてきた。記憶に新しいところでは、ピエール・ブルデューのゾラの社会参加への注目や、日本語訳も出た、クリストフ・シャルルの『知識人の誕生(Naissance des "Intellectuels")』などが挙げられるだろう。ゾラ研究においても、ドレフュス擁護は、晩年のゾラの最も重要な活動として捉えられ、例えば、ゾラを中心とする自然主義文学の主要研究雑誌『レ・カイエ・ナチュラリスト(Le Cahiers naturalistes)』でも、1988年、1998年、2008年とゾラとドレフュス事件についての特集号が組まれるなど、定期的に関この問題について論じられている。

ドレフュス事件とゾラの関係は、このように様々な研究が積み重ねられてきたが、奇妙にも、一連のドレフュス擁護論のテキスト自体を論じたものはごく僅かであった。確かに、「私は告発する...!」のレトリックの特徴を論じたピエール・コニーの「真実というレトリック(La Rhétorique de la vérité)」(1973)や、このテキストで使われた「知識人」という言葉にみられるゾラのドレフュス擁護論の戦略を明快に論じたアラン・パジェスの「ドレフュス事件におけるエミール・ゾラ —知識人か専門家か?(Emile Zola dans l'Affaire Dreyfus, intellectuel ou expert?)」(1993)など、挙げられないことはない。しかし、従来、とりわけ「私は告発する...!」のみに注意が向けられており、他のドレフュス事件関連の論文は、あまり検討されてこなかった。

こういった状況の中、最近になって、ドレフュス事件関連の論文全体を、一つの文学作品として読む傾向も表れ始めている。例えば、ゾラ研究の第一人者であるアンリ・ミトランが、1999年から2002年にかけて著したゾラの伝記の中で、ドレフュス事件関連のゾラの草稿を読み解きながら、ゾラの実社会参加に、フィクションの展開と実際起きた事件の展開が、一つのテキストの中で、同時進行するという新たな文学の創造の意図を、かなり遠慮がちではあるが、読み取っている。さらに、2008年の『レ・カイエ・ナチュラリスト』では、ゾラのドレフュス擁護論を収めた『前

進する真実 (*La Vérité en marche*)』全体を、ドラマや小説というキーワードを手掛かりに自然主義小説として読むことを試みたユルシュラ・バーレルの好論文が掲載されている。

この傾向は、しかしながら、ゾラが事件への参加を決める前後から、読み取られてしかるべきだった。例えばペギーが、「私は告発する...！」を読み、「『共和国大統領への手紙』の冒頭はまだちょっと気づまりな感じである。結論は間違いなく我々の最も素晴らしい文学の金字塔の一つであり、私はこのことを強調しておく¹⁾」と述べたことは知られている。また、事件の初期からドレフュス擁護のために奔走していたベルナル・ラザールが、ゾラを陣営に引き入れようと、面会しに行った時の印象も見逃せない。ラザールは、

Je trouvai de la sympathie ; l'acte lui plaisait, mais il n'avait aucune idée sur l'affaire et je sentais qu'à cette heure elle ne l'intéressait pas ; elle ne l'intéressa que quand le mélodrame fut complet et quand il en vit les personnages!²⁾

と記している。ラザールは、ゾラが裁判の誤りという許されぬ罪よりも、「メロドラマ」としての面白さに魅かれていることに落胆しているが、このラザールの予感、ゾラが『前進する真実』の巻頭の論文「シュレール＝ケストネール氏」の冒頭の、

Quel drame poignant, et quels personnages superbes! Devant ces documents, d'une beauté si tragique, que la vie nous apporte, mon cœur de romancier bondit d'une admiration passionnée. [...]

Mais les personnages, dès aujourd'hui, m'appartiennent, à moi qui ne suis qu'un passant, dont les yeux sont ouverts sur la vie³⁾.

といった件や、この論集の三番目の論文「調書 (Procès-verbal)」の、

Un tel exemple est rare de la perversion, de la démence d'une foule, et sans doute est-ce pour cela que je me suis passionné à ce point, outre ma révolte humaine, en romancier, en dramaturge, bouleversé d'enthousiasme devant un cas d'une beauté si effroyable.

(O. C. XIV, 897.)

という一節を読む時、ラザールの印象は、あながち誤っていなかったといえるだろう。

そこで、このようなメロドラマに魅かれていたゾラという一面と、ミトランが、かなり遠慮勝ちな言い方ではあったが、大胆にも読み取った、新しい文学の創造という観点をヒントに、『前進する真実』を一つの文学テキストとして読むことを試みたいが、本論では、この論集に登場する一人の人物に絞って考えたい。とりあげるのは、ドレフェス再審を求める運動に1897年に加わり、後にゾラをドレフェス陣営に引き入れた上院議員シュレール＝ケストネールである。そこでまず、ゾラ作品全般に見られる人物設定の傾向と、シュレール＝ケストネールという人物の伝記的事実をごく簡単に確認したうえで、『前進する真実』においてどのようにこの人物が描かれていたか、検討する。さらに、ゾラがこの論集全体で、この人物に、どのような役割を担わせていたのかも、考えてみたい。

1. 『ルーゴン＝マッカール叢書』における登場人物の描写の特徴

まずは、事件以前のゾラの主要な仕事であった小説における登場人物の特徴を確認しておきたい。『ルーゴン＝マッカール叢書 (*Les Rougon-Macquart*)』時代のゾラは、自然主義の理論的練成期でもあったゆえに、その理論の大きな後ろ盾である実証主義的決定論の影響から、登場人物を、テーヌが重要視した、環境、人種、時代の三要素から決定づけるのだと主張したことは知られている。それゆえ、例えば、『ジェルミナル (*Germinal*)』の坑夫たちは、炭鉱という環境と苛酷な労働条件により、痩せて浅黒く、父から子へと何代にも渡って同じ仕事に従順に従事し、それによって上の者に従う性質が植えつけられる。だが、不況によって炭鉱の所有者が、さらに厳しい労働条件を労働者に課すようになり、同時に労働者側からもインターナショナルの動きが伝わってくると、その従順な性格から反抗心が目覚め、ストライキに入る、という解釈ができる。あるいは、『居酒屋 (*L'Assommoir*)』のジェルヴェーズは、洗濯女として勤勉に働き、自分の店を持つまでになるが、夫がけがをしたことをきっかけに、酒を飲むようになると、自分の持つアルコール中毒の家系の遺伝が目覚め、自らもアルコール中毒で死んでゆく、と説明することもできるだろう。

このような説明が可能であるゆえに、ゾラの仕事は、自分の描こうとする社会について調査をし、その資料をもとに人物やそれを取り巻く世界を作り上げているという印象を与えやすい。ところが、一方で、ゾラは、しばしば、物語の展開を優先させ、小説の枠組みを構成するような知識をないがしろにするという指摘もある⁴⁾。ゾラの小説における歴史的事実がその顕著な例で、例えば『居酒屋』において、この小説を歴史的に位置づける言及は、わずかに一章の「ウジェーヌ・シューが議員に当選した(1850年4月)」と3章の「5月31日の法律(1850年夏)」のみで、あとは、起床や昼休みといった登場人物の生活サイクルを示す膨大な量の言及に押しや

られてしまい、そのために、物語の後半を歴史的な時間の中に位置付けるのを困難にしているという傾向が指摘できる。(しかも5月31日の法律については、その内容を誤って記述している。この法律では、選挙権を得るために必要な定住年数は三年だが、ゾラは二年と紹介している。)つまり、環境、人種、時代という決定論に基づいて小説世界を構築し、人物を設定する企図がありながら、ゾラは、それらの要素の裏付けとなる資料や知識を、いわば自ら無効にしてしまうのである。

II. 『前進する真実』におけるシュレール＝ケストネールの描写

それでは、我々が取り上げようとしている『前進する真実』には、全般的にどのような傾向がみられるだろうか。このテキストは、小説と異なり、実在の人物が実名で登場する点で、少々勝手が異なる。さらに、もしゾラを現実に忠実な描写を心掛ける作家としてとらえ、実在の人物を彷彿とさせる描写を期待するなら、それは誤ることになる。実際、このテキストに登場する人物は、身体描写がほとんどなく、人物の性格についての言及も一面的で、しばしばカリカチュア的ですからある。この点については、すでに、「私は告発する...!」で描写されるデュ・パティ・ドウ・クラム少佐が、多くの点において、『獣人』に登場するドウニゼ判事—自分の出世のために、無実の人間を断罪されるがままにしておいた—の描写をかなり使っていることが、フィリップ・アモンによって指摘されているが⁵⁾、我々が注目しているシュレール＝ケストネールの人物像ではどうだろうか。実際に検討する前に、この人物を簡単に紹介しておこう。ドレフュス事件に関する研究論文を編んだミッシェル・ウイノックが、その論集に付した略歴によれば、オーギュスト・シュレール＝ケストネールは、科学者でありアルザスの大工場経営者で、第二帝政下においても、共和派陣営の政治家となる。1871年のオー＝ラン県の議員に選ばれ、普仏戦争の戦後処理を協議する国民議会では、アルザス＝ロレーヌの併合に反対する。その反対も及ばずこの地のドイツへの併合が決定されると、1871年7月には、セーヌ県選出の議員となる⁶⁾、とある。偶然にも、ゾラは、この時、『ラ・クロッシュ (*La Cloche*)』紙の特派員として、1872年1月、セーヌ県選出の議員としてのシュレールの姿を報告している。

A la fin de la séance, lorsque les députés consultaient déjà l'horloge pour ne pas manquer le train, M. Scheurer-Kestner s'est dévoué jusqu'à reparler de l'impôt sur le revenu, au milieu d'un bruit intolérable. (O. C. XIII, 796)

帰る電車の時間ばかり気に掛けて議題のことなどお構いなしの議員たちの前で、

空しくも当時の懸案事項であった所得税の問題を力説しているシュレールの姿は、ここでは少々滑稽ですらある。しかしその二十五年後、ゾラが『前進する真実』の中で描くシュレール=ケストネールには、その影は微塵もない。二十五年前の熱心さはもはや滑稽ではなく、英雄そのものであり、この論集中では「フランスへの手紙」まで、同じ調子で賞賛されている。

« **M. Scheurer-Kestner** »

Une vie de cristal, la plus nette, la plus droite. Pas une tare, pas la moindre défaillance. Une même opinion, constamment suivie, sans ambition militante, aboutissant à une haute situation politique, due à l'unique sympathie respectueuse de ses pairs. (O. C. XIV, 885)

« **Le Syndicat** »

Puis, c'est M. Scheurer-Kestner, que le besoin de vérité et de justice torture de son côté, et qui cherche, et qui tâche de se faire une certitude, sans rien savoir de l'enquête officielle [...] (O. C. XIV, 894)

« **Lettre à la jeunesse** »

Alors, c'est vrai, tout le loyal et grand passé a dû s'écrouler chez M. Scheurer-Kestner. S'il croit encore à la bonté et à l'équité des hommes, c'est qu'il est d'un solide optimisme. [...] On assassine chez cet homme la foi en demain, on empoisonne son espoir [...] (O. C. XIV, 906)

« **Lettre à la France** »

Ne voyez-vous pas que, si l'on s'est rué sur M. Scheurer-Kestner avec cette fureur, c'est qu'il est d'une génération qui a cru à la liberté, qui a voulu la liberté? [...] et voilà pourquoi ce grand honnête homme de Scheurer-Kestner est aujourd'hui un bandit. (O. C. XIV, 916)

このように、ほぼ一貫して、シュレール=ケストネールの誠実さや自由や正義を求める姿勢を特に取り上げ、称賛しているわけであるが、シュレールというドレフュス派の主要人物をこのように大げさに讃えているのは、この論集の前半にあたるゾラの事件への参加の始まりの時期は、いわば助走の段階であり、本格的なドレフュス擁護に乗り出す前に、自己の陣営の正当性と誠実さを効果的にアピールする必

要があったことが考えられる。ゆえに、シュレールのイメージも、周囲の騒々しさに対立する静かで清廉なイメージを繰り返し強調している。以下に挙げた引用部分はその顕著な例である。

Le bruit s'était répandu qu'il avait la vérité en main, et un homme qui détient la vérité, sans la crier sur les toits, peut-il être autre chose qu'un ennemi public? Stoïquement d'abord, pendant quinze interminable jours, il fut fidèle à la parole qu'il avait donnée de se taire, dans l'espoir toujours qu'il n'en serait pas réduit à prendre le rôle de ceux-là seuls qui auraient dû agir. Et l'on sait **quelle marée d'invectives et de menaces s'est ruée vers lui** pendant ces quinze jours, **tout un flot d'immondes accusations**, sous lequel il est resté impassible, le front haut. Pourquoi se taisait-il? Pourquoi n'ouvrait-il pas son dossier à tout venant? Pourquoi ne faisait-il pas comme les autres, qui emplissaient les journaux de leurs confidences?

Ah! qu'il a été grand et sage! S'il se taisait, en dehors même de la promesse qu'il avait faite, c'était justement qu'il avait charge de vérité. Cette pauvre vérité, nue et frissonnante, **huée par tous**, que tous semblaient avoir intérêt à étrangler, il ne songeait qu'à la protéger **contre tant de passions et de colères**. Il s'était juré qu'on ne l'escamoterait pas, et il entendait choisir son heure et ses moyens, pour lui assurer le triomphe. Quoi de plus naturel, quoi de plus louable? Je ne sais rien de plus souverainement beau que le silence de M. Scheurer-Kestner, depuis les trois semaines [...]

(O. C. XIV, 887. 下線、太字の強調は引用者による。)

「噂が広まった「Le bruit s'était répandu」 という周囲の動きに、「それを世間に言いふらすことなく「sans la crier sur les toits」 「黙っているという約束に忠実だった「il fut fidèle à la parole qu'il avait donnée de se taire」 というシュレールの寡黙な態度が続き、さらに、「なんという罵詈雑言と狂気の沙汰が彼に襲いかかったことか「quelle marée d'invectives et de menaces s'est ruée vers lui」 「あのような下劣な非難の数々が押し寄せ「tout un flot d'immondes accusations」 という騒々しさに、「彼は冷静さを保ち「il est resté impassible」 「なぜ彼は黙っているのだろう「Pourquoi se taisait-il?」 という変わらぬ態度を続ける。次の段落は「彼が黙っているのは「S'il se taisait」 とシュレールの態度から始めるものの、すぐに、彼が握っている真実が「あらゆる者から罵声を浴びせられ「huée par tous」 という騒々しさを引き起こし、さらに「このような多くの激情と怒り「tant de passions et de colères」 という激しさにエスカレートする。しかしそれに対して、相変わらずシュレールは「沈黙「le silence」 する

といった具合である。

しかしながら、ただ単に寡黙で毅然とした態度が、シュレール＝ケストネールの美徳の全てではない。よく読むと、その描写には、シュレールのある資質が誇張され、繰り返し表現されているのがわかる。

Et pas un rêveur, pas un utopiste. Un industriel, qui a vécu enfermé dans son laboratoire, tout à des recherches spéciales, sans compter le souci quotidien d'une grande maison de commerce à gouverner.

Et, j'ajoute, une haute situation de fortune. Toutes les richesses, tous les honneurs, tous les bonheurs, le couronnement d'une belle vie, donnée entière au travail et à la loyauté. (O. C. XIV, 885)

C'est une intelligence solide et logique qui peu à peu va être conquise par l'insatiable besoin de la vérité. (O. C. XIV, 886)

科学者であり、勤勉な実業家であり、論理的で真実を実直に求め、当代の栄誉と人々の賞賛を一身に受ける人間としての資質がこの論集のとりわけ前半部分において繰り返されている。ところでこの人物像は、このテキストが『フィガロ』紙に掲載される二か月前にはじまった、ゾラの小説『パリ』に登場する人物ベルトロワと多くの部分で重なっている。

Bertheroy était aujourd'hui, à son tour, une des gloires les plus hautes de la France, à qui la chimie devait les extraordinaires progrès qui en ont fait la science mère, en train de renouveler la face du monde. Membre de l'Institut, comblé de charges et d'honneurs (...) (O. C. VII, 1256)

Et, d'un geste, il acheva de dire sa large tolérance, son esprit souverain, dégagé des ignorances et des superstitions, qui faisait de lui, sous les ordres dont il était chamarré, sous ses titres universitaires et académiques de savant officiel, l'intelligence la plus hardie, la plus libre, uniquement passionnée de vérité, comme il le disait.

(O. C. VII, 1258)

描き方に多少の違いはあれ、科学者であり、その時代の栄誉を一身に受け、迷信から解放され、ただ真実のみに突き動かされている知性的人物である点では共通し

ているだろう。ほぼ同時期に、一方は小説において、他方は、論争のテキストにおいて、同じような人物を描いているのは興味深い。ただこの例が、デュ・パティ・ドゥ・クラム例と異なるのは、シュレールの描写は、ベルトロワの描写を使っているとは言えない点だ。というのも、『パリ』のベルトロワには、第三共和政の泰斗であり、共和主義の理想を体現する人物とみなされていた科学者、マルラン・ベルトローという、当時の人々にはすぐにわかるモデルがいたからだ。ベルトローは、シュレールと同様、新しい社会の指導者として当時の人々の敬意を集めていた人物である。そして、ゾラにも、科学者をしばしば新しい社会の精神的指導者として理想的に描く傾向があるが、この人物描写に、それは顕著である。ベルトロワは、この小説において、重要人物とはいえないが、主人公の家庭を温かく見守る守護者のような存在として登場している。シュレールとベルトローは、身体的には似ておらず、シュレールは実業家であり、ベルトローは学者という違いがあるにもかかわらず、両者を同じ要素を使って紹介するところに、ゾラの一連の戦略がうかがえる。つまり、「シュレール＝ケストネール氏」というテキストの発表の直前、ドレフュス擁護の態度を公にしたため、急降下してしまったシュレールの威光を、シュレールと同じような資質で人々の称賛を集める人物を同時期に描くことで読者に思い出させるという意図である。さらに、そのうえで、彼ら二人とも、第三共和政の精神を体現していることを思い出させようとするわけである。ゆえに、シュレールを貶める暴言は、反共和国的な暴言となる。

Sa défaite consommerait la ruine des fondateurs de la République, de ceux qui sont morts, de ceux qu'on a essayé d'enterrer dans la boue. Ils ont abattu le sabre, ils sont sortis de l'Eglise, et voilà pourquoi ce grand honnête homme de Scheurer-Kestner est aujourd'hui un bandit. Il faut le noyer sous la honte, pour que la République elle-même soit salie et emportée. (O. C. XIV, 916)

このシュレールの運命と共和国の運命を重ね合わせながら、ゾラは、ドレフュス事件をドレフュスという個人の命運にかかわる問題から、共和国の危機という問題へと発展させようとしている。そして、共和国を救うとは、愛国的な行為であるが、ここでまた、もう一つの戦略が明らかになる。それは、ドレフュス派を「愛国者」としてアピールすることだ。これらの戦略は、実際、ドレフュス派全体の戦略でもあるのだが、中でも愛国は、ドレフュス派と反ドレフュス派が激しく奪い合った言葉であった。反ドレフュス派は、ドレフュスを擁護することは、彼を断罪した軍法会議を批判することであり、それは軍隊の地位に傷をつけ、さらには、軍隊が守る

フランス社会の秩序を乱すに等しいとして、ドレフュス派を「非国民」と呼び、逆にドレフュス派は、宗教的偏見から無実のドレフュスを断罪されるがままにしておくのは、フランス革命以来の自由、平等、友愛の伝統に基づく共和国の精神を否定するものとして、反ドレフュス派を「非国民」と呼んでいたのである。それゆえゾラはまず、この反ドレフュス派の愛国を攻撃する。

On persécute aujourd'hui les juifs, ce sera demain le tour des protestants ; et déjà la campagne commence. La République est envahie par les réactionnaires de tous genres, ils l'adorent d'un brusque et terrible amour, ils l'embrassent pour l'étouffer.

(O. C. XIV, 916)

「今日はユダヤ人を迫害しているが、明日はプロテスタントの番だろう « On persécute aujourd'hui les juifs, ce sera demain le tour des protestants » と、反ドレフュス派の共和国に対する愛を排他的で、かつ「唐突ですさまじい愛 « un brusque et terrible amour » と評し、「彼らは窒息させるためにそれ（共和国）に口づけするのだ « ils l'embrassent pour l'étouffer »（丸括弧内は引用者による）」と言う。これは、反ドレフュス派の愛国が、排他主義に陥りかねない点をついた鋭い非難だが、それでは、ドレフュス派の「愛国」が、より正当性を主張できるかということ、実際、それも難しいのだ。とりわけ、国境地帯のアルザス出身で、プロテスタントのシュレール＝ケストネールは、反ドレフュス派の見地から考えるなら、恰好の「非国民」と見なされてしまう人物であろう。しかし、逆説的ではあるが、ドレフュス派、とくにゾラにとってシュレールは、マルスラン・ベルトローの肖像を引き合いに出さずとも、いやベルトロー以上に、愛国を語るのに格好な人物であった。このことを説明するには、再び、シュレール＝ケストネールの経歴に戻ってみななければならない。

ゾラがレポートした議会でのシュレール＝ケストネールの様子は、すでに紹介したが、その一年前の国民議会で、プロシアから言い渡されたアルザス＝ロレーヌの割譲問題の様子もゾラは伝えている。和平のためにプロシアの要求を呑むことに賛成する議員が圧倒的な中、ゾラは、これに反対するケレールというアルザス＝ロレーヌから選出された議員たちの代表者の演説に注目している。

Brusquement, M. Keller est monté à la tribune pour déposer sur le bureau une proposition signée par les représentants de l'Alsace et de la Lorraine. Dans un langage fort digne, M. Keller, parlant au nom de ses collègues, a dit que la volonté souveraine des électeurs qui les ont envoyés à l'Assemblée est de protester contre toute annexion.

L'Alsace et la Lorraine, fidèles à la France, ont signé de leur sang un pacte qu'aucune assemblée, qu'aucune plébiscite ne peuvent briser. On ne dispose pas d'une nation comme d'un vil troupeau. Aussi, les vaillantes populations de l'Est signifient-elles à l'Allemagne et au monde qu'elles sont françaises et qu'elles resteront à jamais françaises. Elles se sont battues, elles sont prêtes à se battre encore. Elles déclarent solennellement nul et non avenu tout acte décidé, soit par une assemblée, soit par un plébiscite, qui les séparerait de la mère patrie. (O. C. XIII, 362)

ここで強調されているのは、アルザス＝ロレーヌの代表者たちの愛国心である。さらにゾラは、国民投票の結果を伝えるレポートで、割譲に反対し戦争続行を訴える 107 票を以下のように報告している（シュレール＝ケストネールの経歴からわかるように、彼の票もこの 107 票のうちにある）。

Vous savez ce qu'il est sorti de l'urne, cinq cent quarante-six voix pour la paix, cent sept voix pour la guerre. Ces cent sept voix resteront légendaires. Il viendra un jour où les cent sept voix se lèveront et diront : « Nous avons donc eu raison de déclarer devant l'Europe que l'Alsace et la Lorraine étaient à jamais françaises. »

(O. C. XIII, 392)

アルザス＝ロレーヌの代議員たちの愛国心に応えるかのように、ゾラもこれらの地は永遠にフランスであり、彼らはフランス人であり続けるとやや興奮気味に伝えている。この時確認したアルザス＝ロレーヌの愛国心が、『前進する真実』に収められた四番目の論文「青年たちへの手紙 «Lettre à la jeunesse»」のシュレール＝ケストネールの描写にも表れている。

Et, pour souffleter le patriotisme, on est allé choisir cet homme, qui est dans nos Assemblées, le dernier représentant de l'Alsace-Lorraine! Lui, un vendu, un traître, un insulteur de l'armée, lorsque son nom aurait dû suffire pour rassurer les inquiétudes les plus ombrageuses! Sans doute, il avait eu la naïveté de croire que sa qualité d'Alsacien, son renom de patriote ardent seraient la garantie même de sa bonne foi, dans son rôle délicat de justicier. S'il s'occupait de cette affaire, n'était-ce pas dire que la conclusion prompte lui en semblait nécessaire à l'honneur de l'armée, à l'honneur de la patrie?

(O. C. XIV, 906)

これらのゾラのテキストにおいて、アルザス＝ロレーヌは、ドイツと隣接する辺境地域なのではなく、普仏戦争中もその戦後処理においても、フランスに対する忠誠心と愛国心を身をもって示し、フランスのために犠牲となったアルザス＝ロレーヌなのである。だから、「彼は無邪気にもアルザス出身者であるという資質や熱狂的愛国者という名声が、正義の士としての難しい役割を担うことにおいて、彼の誠意の補償になるだろうと信じてしまったのかもしれない。《 Sans doute, il avait eu la naïveté de croire que sa qualité d'Alsacien, son renom de patriote ardent seraient la garantie même de sa bonne foi, dans son rôle délicat de justicier. 》」とすることが、つまり、アルザス出身者だからこそ愛国者なのだ、ということをも可能にさせたのである。

結びにかえて

以上のように考察するとき、シュレール＝ケストネールのこの論集における役割が明確になる。それは、実際の事件における活動とも切り離せない役割だが、ゾラはまず、事件を境に急降下してしまっただけでなく、シュレールの名誉回復を図った。このような手続きを踏んだのは、相次ぐ証拠隠滅やでっち上げの連続で、ドレフュスの無罪を証明することが物理的に難しくなってしまったため、世論を使って、この問題を、共和国の危機という問題に発展させる必要があったからだと推測される。それゆえ、宗教的偏見から免れた勤勉な科学者という共和主義イデオロギーを体現する愛国者シュレールのイメージを回復させながら、共和国再生の物語を事件の展開にそって創作する必要があったのだ。また、その愛国をアルザスという国境地帯から実現させるという一種撞着語法的な大胆な技法に訴えている点も、ゾラの論戦が注目を引くのに成功したゆえんであろう。

ところで、シュレール＝ケストネールが同じ調子で賞賛されているのは、「フランスへの手紙」までであり、「私は告発する！」以後、変化する。このパンフレットでは、それまで賞賛の対象だったシュレールの議会での平静な態度は、「後悔するだろう《 je crois bien qu'il finira par éprouver un remords 》」「あまりにも手ひどく罰せられた《 il est si cruellement puni 》」(O. C. XIV, 929)と評されてしまう。これは、歴史的事実として説明するならば、シュレール＝ケストネールが、「私は告発する！」の発表に反対だったという証言が、理由として挙げられるのかもしれない。しかし、ゾラが構想する物語を考えると、その次の段階は、それまでの誠実さや寡黙さを強調することでドレフュス派の美德を称える英雄伝とは対照的な、激しく革命的でなければならなかったのだろう。いずれにしても、この人物の描写の変化は、事件も物語も確実に次の段階に入ったことを示しているといえよう。

¹⁾ PEGUY, Charles, « Les Récentes œuvres de Zola », *Le Mouvement socialistes*, les 1^{er} et 15 novembre 1899. In PEGUY, Charles ; BURAC, Robert (Edition présentée, établie et annotée par), *Œuvres en prose complètes*, I, Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade. 1987, p. 246.

²⁾ 比較的よく知られているこのラザールの印象は、コレット・ベッケルによれば、彼がジョゼフ・レナックに宛てたメモにあり、それは現在、パリのフランス国立図書館に収められているが、本論では以下の文献を参考にした。BECKER, Colette, « Zola et l’Affaire Dreyfus », in ZOLA, Emile, *La Vérité en marche*, Garnier-Flammarion, 1969, p.32

³⁾ ZOLA, Emile, *La Vérité en marche*, In ZOLA, Emile, *Œuvres Complètes*, Cercle du livre précieux, 1966-1970, XIV, p. 885. 尚、以後この全集は、O. C.と省略し、引用テキストの収められた巻号とページ番号のみ記す。

⁴⁾ Cf. CHARLE, Christophe, « Zola et l’Histoire », In SACQUIN, Michèle (s.l.d.) *Zola et les historiens*, Bibliothèque nationale de France, 2004, p.12-21.

⁵⁾ HAMON, Philippe, *Le Personnel du roman*, Droz, 1983, p. 46.

⁶⁾ Cf. WINOCK, Michel (présentation par), *L’Affaire Dreyfus*, Seuil, 1998, p. 40-41.